

「救いと教会を生み出す神の愛」

ローマ5：6-8

堀田修一 22・11・20

- I 「実にキリストは、私たちがまだ弱かった（律法を完全に守ることができない霊的な弱さ）ころ、定められた時に、不敬虔な者（自分の罪を認めず神を畏れ敬わない者）たちのために死んでくださいました」：6。この6節は、聖書全体の中で、最も偉大なみことばの一つ。神の愛について語るものとして、この節に勝るものはない。これはヨハネ3：16の講解と述べても差し支えない。6節はすべてを言い尽くしている。完全な言明である。7，8節は、その言明の入念な説明。この文脈でパウロが示したいのは、いかなる神の愛が救いを生み出したかである。神の愛を解き明かすことこそパウロの熱い願い。いつの時代も、迫害、苦難があっても喜んで全世界で主の福音を語り、主の教会を建て上げているのは、自分に対する神の深い、熱い愛を心で味わっているキリスト者である。私たちの救いの要は、神への私たちの愛ではない。神が私たちをまず愛してくださる愛である。神の愛が、私たちの救いの産みの親。神に感謝します！偉大な神の中には、「罪に対する憎しみ、聖なる怒り、のろい」と「罪人に対する永遠の愛」が存在している。救いは、神の偉大な永遠の愛から生まれた。神こそ、救いのすべてを計画されたお方。これは「定められた時に」という言葉で示されている。救いは、世界の基の置かれる前から、世界が造られるより前、人間が造られる前、神がこの壮大にして栄光に富む救いの道を計画された。「神は、世界の基の置かれる前から、この方において私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされた。…愛をもってあらかじめ定めておられました」（エペソ1：4，5）。救いは、後知恵、後付けではない。神にとり後からの思いつきの御業はない。神は一切のことをご存知。私たち人間の愛は衝動的で移り気である。しかし、神の愛は変わることがなく永遠である。そして私たちの救いは「永遠」の中で計画された。偶然のものではない。行き当たりばったりのものではない。救いの計画、定めは、神の愛から出ている。神は世界の基の置かれる前から私たちのことを意識し、救いに選んでおられた。主が罪人の私たちに代わって死なれることは、私たちが生まれる前から計画されていた。心から感謝し神を崇めます。
- II 「正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません」：7。人が、ある人の身代わりに死ぬまで愛することは、その人が正しい人だからという理由では不十分である。善良な人（情け深い人）、自分が大きな愛を受けた人のためなら、進んで死ぬ人が、あるいは、いるかもしれない。それは、例外的なことである。
- III 「しかし、私たちがまだ罪人だったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます」：8。神の愛の驚くべき大きさは、私たち人間が、どのような者であったときに愛されたかで、神の愛の深さ、広さ、大きさが「明らかにされる」。神が驚くべき愛（神の大切なひとり子が私たちの身代わりに十字架で死なれた愛）を明らかにされたときの私たちは、①「まだ弱かった」時。：6＝自分の力では、神の

律法を完全に守る力がなく弱く、自分の行いによって救われることは、全人類が不可能だった。

②「不敬虔だったとき」：6＝不敬虔とは神と似ていないということ。不敬虔とは、最初に人間が与えられた神のかたち（神のご性質）が汚損されていること。「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず（心が罪で曇っているので神の栄光、御性質を反映することができない）」ローマ3：23。人間は、不敬虔のため、神に近づき神と親しく交わることができなくなった。不敬虔とは、神に敵対することである。私たちは主を信じるまでは、神に敵対していた。不敬虔は、「神はいない」と考え、高慢であり、神を求めない（詩篇10：4）。自分の力で生きていると思いが上がっている。神に生かしていただいていると感謝もせず。※48年前の私の姿。

③「私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれた」：8。罪人とは、「汚れ、好色、偶像礼拝（真の神ではないものに支配され礼拝する。真の神以上に、人、自分、富、地位、世間体等に心を奪われる）、魔術（占い）、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、遊興」（ガラテヤ5：19－21）の罪に支配されている人。私たちは「自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」エペソ2：1－3。こうした罪人の私たち全人類のために主は十字架で死なれた。良い人や愛しやすい人ではなく、卑しく、憎むべき、敵対していた私たちが神は愛して主を十字架に付けられた。これまで、この神の偉大な愛を心から理解し喜び感謝してきたのは、自分自身の罪深さを最も自覚し痛感していた人々だった。神の愛を測る尺度は、どのような人々を愛されたかである。自分にとっても良くしてくれる人を愛することは難しいことではない。しかし、自分の悪口を言い、敵対する人、関係が難しい人を愛することは、非常に難しい。だが、神は違う。私たちは自らの罪の故に刑罰を受け、永遠の滅びに行って当然だった。にもかかわらず、神は私たちの罪を正しく憎み、罪人である私たちが愛された。そこで、神は、私たちの罪を正しくさばくために、ひとり子の主イエスを十字架に付け私たちの身代わりに刑罰を受けさせ、神の義を全うされた。と同時に、私たち罪人が滅ぶ事を望まず、救うという偉大な愛も主の十字架で明らかにされた。主の十字架は二つのものを全うした→神の正しい義と神の偉大な愛とを！心から神に感謝し、神を崇めましょう。

- IV 本日の礼拝は、教会創立57周年記念礼拝です。最後に、神の愛は私たち個人個人の救いを生み出すと同時に、教会（キリスト者の集まり）をも生み出している恵みに感謝したいと思えます。それを示すみことばは、「キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自分でしみや、しわや、そのようなものが何一つない、聖なるもの、傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです」エペソ5：25－27。主が「教会」を愛し、「教会」のためにご自分を献げられた（十字架で死なれた）というみことばは、非常に大切な真理を教えてください。それは、神の愛によりキリストが十字架で死なれた目的は、一人一人の救いを生み出すと共に、神の教会、栄光の教会を生み出すためという恵みである。それほど、主の地域教会形成と公同の教会は、神にとり非常に大切な共同体だということである。キリストは、すべての人と教会を愛し、御自身を献げ十字架で死なれ、①義認の恵みを与え、罪の赦しと神との平和、神との交わりの回復を与え、②キリスト者個人とキリスト者の集まりである教会（主の御からだなる共同体）をみことばと御聖霊と日々の御父の愛の訓練（御手にある苦難を含む）による霊的成長を与え続け聖め続けておられる（聖化）。それで終わりではなく主の再臨の日に「聖なる、傷のないもの

となった教会を、ご自分の前に（主の再臨の日に）立たせるためです」：27（栄化）。つまり、主の再臨の時の花婿なるキリストと花嫁である教会（主を信じる私たちと先に天国に行っている人々を含む）の結婚式である。これが神の壮大な計画である。教会は、まさしく今も、キリストの花嫁です。しかし、花婿なるキリストとの結婚は、その完結を、主の再臨の日という未来に残し、待ち望んでいます。主の再臨の日、次のみことばが成就する→「ハレルヤ。私たちの神である主、全能者が王となられた。私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時に来て、花嫁（旧約と新約のすべての神の民の集まりである教会）は用意ができたのだから。花嫁（「神がご自分の血をもって買い取られた（贖われた）神の教会」使徒20：28）は、輝くきよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行い（聖霊の実である神に喜ばれる行い）である」黙示録19：6-8。

祈り：私たちの救いと神の民の集まりである教会を生み出してくださった神の偉大な愛と私たちが弱く、不敬虔で、罪人であった時に主が十字架で身代わりに死なれた愛を心から感謝します。